

家庭科教員養成における実践的指導力の育成（2）

—コミュニケーション能力を育てる保育学習の構想と実践—

山内 拓司・井上えり子

(京都教育大学大学院・京都教育大学)

Fostering Practical Teaching Skill in Training Home Economics Teacher (2)
: Plan and Practice of Nursery Class to Develop Communicating ability

Takuji YAMAUCHI, Eriko INOUE

2007年11月30日受理

抄録：本研究の目的は実践的指導力を育成する家庭科教育法のプログラム開発と授業実践によるその効果の検証である。本プログラムでは「中等家庭科教育Ⅲ」（3年後期、2005年10月～2006年1月、受講生19名）において保育学習の授業研究を行い、京都府立朱雀高校定時制で研究授業を3回実施した。プログラムの全体構成と指導過程および研究授業の構成については本学紀要第112号で報告した。本報では、対象学生のレポート分析および指導過程での観察結果をもとに受講生が獲得した知識・技能・実践的思考を明らかにし、次に対象生徒に対する観察結果と事後の感想文の分析により研究授業の成果について検証する。レポートの分析結果から受講生全員が達成感を感じ授業に対する意欲が向上するなど本プログラムの有効性が確認された。さらに、生徒の授業参加および授業内容の理解は全体として良好であり学習意欲の向上も確認された。また、3回の研究授業を通じて受講生と生徒の双方に学習意欲やコミュニケーション能力の向上がみられた点は、本プログラムの成果であると考えられる。

キーワード：家庭科教員養成，実践的指導力，高大連携，保育

I. はじめに

本研究の目的は、実践的指導力を育成する家庭科教育法のプログラム開発と実践による教育効果の検証である。教科教育法「中等家庭科教育Ⅲ」（3年後期、2005年10月～2006年1月、受講生19名）のプログラムに①公立高校定時制課程（以下、定時制高校と略記）との密接な連携による授業研究および②現代の教育課題である不登校問題に対応した家庭科の授業研究を導入し、講義において学習指導案と教材を作成、受講生が京都府立朱雀高校定時制課程（以下、朱雀高校と略記）で研究授業を実践する。ここでは不登校経験者の割合が高い定時制高校の実態に対応してコミュニケーション能力の育成を主眼とした保育の授業研究を実施する。

このような教育現場での実践を踏まえることにより、模擬授業の実施に留まっていた従来のプログラムよりも高次のレベルでの教材研究・授業研究を行うことが可能になる。第1報¹ではプログラムの全体構成と指導過程および研究授業の構成を述べた。本報では受講生のレポート分析と指導過程での観察結果をもとに受講生が獲得した知識・技能・実践的思考を明らかにし、生徒に対する観察結果と事後の感想文などの分析により研究授業の成果について検証する。

II. 学生レポートの分析とプログラムの成果

1. 研究授業の達成感と授業や教職に対する意欲の向上

対象とする学生は途中放棄の者3名を除いた16名である。当該学生には講義終了後2週間以内に本講義について自由に記述（A4用紙3枚以内）するよう指示しレポートを提出させた。その内容は①研究授業の達成感と

授業や教職に対する意欲の向上、②教材研究、③指導案作成、④授業運営、⑤生徒理解に分類された。表1は受講生のレポートの記述内容および所属と研究授業における分担を示したものである。

①については、表現に差異はあるものの全員が達成感を感じ、授業に対する意欲が向上した旨を述べていた。このことから本プログラムは受講生の教職に対する意欲の向上には効果があったといえるだろう。具体的に、どのようにして意欲が向上したのかをみてみよう。以下は表1Aの事例である。

『3人とも一生懸命授業をしてくれていて、わかりやすかったです。』これは朱雀高校の生徒の感想文の一部である。授業者の一生懸命な姿が生徒に伝わったということが分かったとき、私自身大きな達成感を感じた。お互いがどのような人間なのかを全く知らない中で、また夜の眠たい時間に生徒も私たちの授業に協力的で、素直にうれしかった。……今後教師として生きていくうえで、朱雀高校で授業した経験は私の財産になるだろう。

Aは大部な参考文献を読むなどの課題をこなして指導案を作成し、初回の授業者として初対面の生徒の前で授業を行うという難しい課題に取り組んだ学生である。授業では得意のギターの弾き語りでも互いの緊張を解きほぐしながら、授業に集中させるという方法を用いて導入を成功させ、中盤でもハイハイ運動を実演し生徒を授業に惹きつけた。Aは最も精力的に取り組んだ学生である。彼は生徒の感想文から授業が評価されたことを知り大きな達成感を得たという。

同様の例としてPは以下のように述べる。

「授業は終始和やかに進んだ。グループ活動も自分達が考えていたよりもずっと盛り上がり、私達が考えていなかったくらい重要な視点を気づいてくれて驚いた。また、授業後の振り返りで言ったように、授業に対しての反省もいくらかあった。しかし、最後の方に、生徒達が自分に対して暖かい言葉をかけてくれたりと、この授業を頑張ったよかったと思えることのほうが多かった。こういった喜びが教師の醍醐味だと思う。こうやって様々な経験をつむ事で、将来に対してのモチベーションが上がっていく。これからも積極的に自分のためになることを経験していきたいと感じた」。

これらは授業における生徒の反応や事後の感想文を通じて得られた成功体験が学生の達成感と意欲の向上につながることを示している。生徒に授業が受け入れられ評価された場合に、受講生は強い達成感を得、それが意欲の向上につながるのである。こうした受講生の成功体験をきめ細やかな指導によって保障した点が本プログラムの成果であるといえよう。

2. 教材研究

教材研究では次のA、J、Mの事例がその特徴を示している。

「私は2ヶ月前附属中学校に実習に行ったが、その時は教材研究がどういうものか分からなかった。教育実習の授業は教科書の内容を生徒に伝えるだけだった。……朱雀高校の授業での教材研究では教科書のバックグラウンドになる部分を沢山本を読んで勉強した」(A)、「私たちは、自分たちで『離乳食の授業がしたい』と言ったのですが、乳児に関する知識、離乳食に関する知識、育児に関する知識がほとんど無い状態で、授業を考える前にそれらについて勉強することが必要となりました」(J)。

表1 レポートの記述内容

グループ	学生	役割	①達成感・意欲向上	②教材研究	③指導案作成	④授業運営	⑤生徒理解
1	A	授業者 指導案作成	○	○		○	○
	B	授業者 教材作成	○	○		○	○
	C	授業者 補助教材作成	○			○	○
2	D	授業者 指導案作成	○		○		○イメージ 変化
	E	授業者 指導案作成	○			○	○
	F	授業者 補助教材作成	○			○	○イメージ 変化
	G	授業者 補助教材作成	○	○			○
	H	授業者 補助教材作成	○	○			○
	I	授業者 補助教材作成	○	○			○
	J	授業者 指導案作成 教材作成	○	○	○		
3	K	指導案作成 教材作成	○	○		○	○イメージ 変化
	L	授業者 指導案作成	○			○	○
	M	授業者 教材作成	○			○	
	N	授業者 補助指導案作成	○		○		○イメージ 変化
	O	授業者 補助教材作成	○	○			○
P	授業者 補助教材作成	○	○			○	

上述のように、大半の受講生は家庭科の専門的知識が不足しており、教材の理解が不十分な状態で教育実習の研究授業を行っている。この背景には1998年の教育職員免許法（以下、免許法と略記）の改正により専門科目の必修単位数が半減したことがある。例えば、免許法では保育科目の必修単位数は2単位であるが、高校の保育を教えるにはこれでは不十分である。本プログラムでは授業に関する文献を指定し、そこから情報を精選し教材化する方法を指導し教材研究の中で専門的知識の力量形成を図った。

Mは今回の方法について次のように述べる。

「実際、学校の現場では、ここまで準備を完璧にして授業にのぞむことは不可能に近いと思う。教育実習でも感じたが、教師は、授業をすること以外に、とても多くの仕事をしなければならない。そのために、教材研究をゆっくりしている時間などないのである。これは、現場で働く先生方もおっしゃっていたことだ。そのため、そういった面から考えると、今回の授業は実践的ではないと考えられる。しかし、本来は、授業というものはこのようにして作っていくべきなのだということを学ぶことができた（下線は筆者）」。

教育実習では時間の制約上指導書とインターネット情報のみの簡易な方法で教材研究を済ましてしまう学生も少なくないが、Mの下線部の文言が示すように、本プログラムを経験することで、受講生は専門的知識・技術の重要性や教材研究の本来のあり方を認識したといえる。

3. 学習指導案作成

学習指導案作成について述べているのは3名である。このうち特徴的なD、Jについて検討したい。

Dは「自分が授業を考える時に困った点がありました。それは授業のアイデアが浮かばないことです。こんな感じの授業にしたいというホンワカしたイメージは浮かぶのですが具体的な活動が浮かびませんでした」と述べるなど学習指導案の作成を苦手としていた。Dは指定された文献を精読して乳幼児の摂食機能について学習し、それを教材化することにより授業のイメージが具体化することを経験し、この過程が教材研究であり学習指導案はそれを表現したものであることに気づいてゆく。Dはレポートで「しっかりと育児に関する本を読めば活動のアイデアももっと浮かんだのかもしれないと思えます。また、浮かんだアイデアを実際にやって使えるアイデアかを確かめることも大切ではないかと感じました」と述べ、授業の核となる知識を生徒に伝えるための有効な教材を探究し具体化する過程が自分の課題であることを理解したのである。

Dと同じ第2グループで学習指導案の作成に取り組んだJは次のように述べる。

「離乳食の指導案を作成する前は、愛情と乳児の月齢に合わせた離乳食を作ることが大切だと思っていたのですが、乳児の月齢に合わせた離乳食作りなら、育児についての本を読めばすぐわかることだし、愛情がないと子育てができないことぐらい誰でも知っていることなので、それだけでは授業として成り立たないことが指導案の作成を通してわかりました。それよりも大切なのは、乳児がどんな風に発達していくのかを知り、乳児の発達を理解した上で、『なぜ、乳児には離乳食が必要なのか』や『なぜ、月齢に合わせた離乳食を作る必要があるのか』について考えることです」。

Jが述べるように第2グループは当初「愛情を教えたい」と主張し、離乳食を作って食べさせることが愛情であると考え、それを生徒に授業者が言葉で伝える学習指導案を提出した。しかし、学習指導案を作成する中で、それでは一方的に授業者側の考えや思いを伝えるだけで、生徒が新たな知識を獲得する授業とはならない点を理解した。また、受講生は愛情を強調するいっぽうで発達に関する知識理解を軽視する傾向があったが、専門的知識を学ぶ中で「なぜ離乳食が必要なのか」を乳児の摂食機能の発達の観点から理解し、「なぜ」を問う授業すなわち思考力を育成する授業展開が重要であることを理解するようになったのである。第2グループの指導案作成過程は表2に示すように4度の訂正を経ている。授業展開を何度も練り直し、模擬授業や授業練習を行い最終的な指導案を作り上げる中でDやJは指導案の作成方法を理解したのである。

表2 学習指導案作成過程(第2グループ)

第1次指導案	各自で学習指導案を作成し、グループで話し合い、1人の案を提出。	
第2次指導案	学習指導案担当者を複数決定。問題点指摘。乳幼児の摂食機能に関する文献を指定講義後、担当者全員が指導案を執筆。	
第3次指導案	複数の指導案をもとにグループ全員の討議による模擬授業の指導案作成。	第1次教材作成
第4次指導案	模擬授業での検討をもとに、授業者と学習指導案担当者で訂正。	第2次教材作成
第5次指導案	グループ全員が参加し、授業練習を重ね学習指導案を訂正し完成。	第3次教材作成

4. 授業運営

授業運営については8名が記述していたが、このうち特徴的なE、F、L、Mについて考察したい。

授業に苦手意識をもつEは第2グループの後半の授業者となったが、授業前はプレッシャーから不安を感じていたという。Eは次のように述べる。

「授業中、全体をしっかりと見渡す余裕がなかった。特に後ろのほうに座っておられた人のところまでは、ほとんど見られていなかった。もっと全体を見られていれば、うまくいい発言をひろえただろうし、いいロールプレイングを見つけられたらと思う。授業をそのようにして膨らませられたらよかったなと思う。また、生徒さんの発表に対して、うまく対応できなかったのが、一番悔しい。いい発表であるのにうまく返せない。……今回、授業で必ず伝えたいことをしっかり頭において授業をすることの重要性、模擬授業をすることの意義を実感することができた。そして、人前で話することに少し慣れることができたように思う。これは、私にとって大きな収穫である。みんなで授業をつくったということ、授業をやり遂げたということですごく大きな達成感を味わうことができた」。

授業経験の少ない受講生にとって授業運営は難しい。とくに、Eのように人前で話すことに苦手意識をもつ受講生ではなおさらである。本プログラムでは模擬授業以外にも授業練習を繰り返すことで自信をもって人前で話せるよう配慮した。Eは本番では練習以上の力を発揮し達成感を得たが、それに満足せず、多くの反省点を挙げている。そして、「悔しい」という表現が示すように、実践で学んだことを次に生かそうとする向上心が窺える。

授業補助者としてEとともに授業を行ったFは、一斉指導だけでなく机間巡視などの個別指導も重要である点を次のように指摘している。

「授業者の人たちは前に出て懸命に説明をしたり、提示したりするが、一番生徒とコミュニケーションがとれていると感じた場面は、授業者が生徒の机の間をまわって声をかけ、一対一で話している場面であった。その様子を見て、高校の家庭科の授業を思い出した。机の上でみなが同じ作業をしているとき、先生がいつも机間巡視をしていた。たまに先生が生徒に声をかけていた。私は声をかけて欲しいと思っていた。それはきっと、認めてもらいたい、気にかけてもらいたいと思っていたからである」。

Fは自分の体験と重ねて生徒一人ひとりをよく見て適切な声かけを行うことが、授業におけるコミュニケーションとなることを再確認した。研究授業では乳児の食事場面における声かけの重要性について取り上げたが、声かけは授業において生徒とコミュニケーションとる上でも重要であることに気づいたのである。

第3グループの授業者であるLはフォトランゲージによるグループ活動に不安を感じ、自分が生徒役となって練習を重ねた。Lは「自分自身が生徒役になって、実際にグループワークを試みることで、雰囲気と流れをつかむことはできたが、答えやすいように、しかし、答えを限らせてしまわないような発問を考えるのに苦労した」と述べる。Lは事前に授業をシュミレーションし発問について時間をかけて考える中で授業における発問の重要性を認識したのである。

ところで、初心者が授業を行う上で難しい点が時間配分である。Lとともに第3グループの授業を担当したMはこの点について次のように述べる。

「授業は、発問に対する返答が、予想していた以上にすぐに出たり、予想していたものよりもいい答えが出てきたりして、とても進めやすかった。しかし、そのために予想していたより速いスピードで授業が進んだり、また逆に、個々で考える場面等では、皆とても真剣に考えていたために、予定より多く時間をとったりした。そのために、時間配分は予定していたものとは大幅にずれてしまった。授業に盛り込んだ内容が豊富だったため、最後のまとめのところでゆっくり時間がとれなかったものの、何とか時間通りに全ての内容がおさまった」。

Mは何度も授業練習を行ったが、本番では臨機応変の対応が要求され、時間配分を難しいと感じたものの、個々の活動時間を調整しながら全体として時間内に収める感覚を掴んだようである。

以上のように、受講生は、人前で話すこと、机間巡視、発問、時間配分など授業運営の基本スキルについて、つよく意識したようである。このほか、話し方、表情、板書の方法なども記述されていた。いずれも教育実習で学んだ基本的スキルであるが、本プログラムを経ることにより、意識して練習しなければ習得できないことを改めて認識したのである。

5. 生徒理解

生徒に関する記述は15名にみられ、その多くは授業の中での関わりや様子を述べたものであった。注目されるのは4名が定時制高校に対するイメージが大きく変化たと述べている点である。定時制に対しマイナスイメージを抱いていたが、研究授業の中でそのイメージが大きく変化したというのである。その点を詳しく述べているFの事例をみてみよう。

「相手は会ったことも話したこともない定時制高校の生徒である。最初は、どのような雰囲気なのか、反応はあるのかなど、不安と戸惑いが交錯していた。蓋をあけると、年齢などの多少の違いはあるが、私たちと何も変わらない生徒であった。ひとつひとつの展開に敏感に反応し、参加していた。むしろ、自分が高校の授業を受けていた頃よりも良い反応であったと思う。その反応の良さが、今回の私たちの授業の充実感と達成感を感じさせてくれているのだと思う」。

生徒に対する偏見はあってはならない。しかしながら、社会には定時制生徒に対する偏見があり、受講生の中にも定時制生徒に対してマイナスイメージをもつ学生が存在した。こうした中で、Fは定時制生徒と自分の高校時代との共通点を確認し、授業に熱心に参加している様子を見てマイナスイメージを払拭したのである。さまざまな生徒と直接接することで、生徒への理解が深まることを示す例といえよう。

同様の例はNにもみることができる。Nは「授業を終え最も感じることは、本当にいい経験をすることができたということである。定時制高校の生徒に授業をするということにはじめはすごい不安があったが、ほかの班の授業を見学していくなかで、定時制の生徒への見方が大きく変化した。そして自分たちの授業をなんとか行うことができたのだと思う。今まであまり接することのなかった人たちのことを考え授業を作成し、それを通じて関わることで、自分が少し成長できたように思う」と述べる。

Nは3回の研究授業を通じて生徒理解を深め、視野が広がるとともに自らの成長を実感している。また、定時制のイメージが大きく変わったという受講生の中には、次のKのように、生徒にとっての授業の意味に気づく受講生もいる。

「授業風景を見ていると、違うことをしていても私たちの授業に耳を傾けている子や他の子と一緒に離乳食を食べることができなくても、授業に興味がある子など様々な生徒の様子を見ることができました。そこでどんな事情があっても勉強がしたい、学校に行きたいと思う子たちが集まっているのだと思いました。それだけ、学習内容にも敏感に反応を示しているのだと感じました。今までのイメージも崩れ、どんな生徒にでも学校で授業するという大切な時間であることに改めて気づくことができよかったです」。

Kは、授業中に携帯電話でメールを見ている生徒や学生とロールプレイングした生徒を観察しながら、生徒にとっての授業の意味を改めて考えた。そして表面的な態度から判断するのではなく、その背景まで含めて生徒を理解しようとするのが重要である点に気づいたのである。

生徒理解に関連して、授業におけるコミュニケーションについて考察したFの事例をみてみよう。

「授業を通して、『教師と生徒の距離』について考えることができた。教師は教える立場、生徒は教わる立場、と割り切って考えていた。自分自身、義務教育を受けていた頃にそう感じていたのである。しかし、実際に授業を作り、客観的に授業を観察したり主体的に参加したりすることによって、互いの距離間や教える側は教わる側の生徒たちから教わるのがとても多いということに気がついた」。

Fは授業における学びが一方方向（教師→生徒）であるという固定観念にとらわれていた。しかし、定時制生徒へのマイナスイメージを払拭する中で、双方向の関係が成立することに気づき、それが学びに広がりや深まりをもたらす点を理解したのである。さらに、生徒との関係性をつくる上での自らのコミュニケーションのあり方について次のように述べる。

「私もなかなか生徒の中にぐいぐいと入っていくタイプではないように思う。しかし、時にその積極性や生徒と深く関わろうとする姿勢が必要であるということに十分気づかせてもらった」。

Fは内省的で積極的に人と関わっていくタイプではないが、コミュニケーションをとるためには積極性が必要であることを再認識したのである。

6. プログラムの成果

表3はこれまでの分析をもとに本プログラムにおいて受講生が学習した実践的指導力にかかわる知識・技能・思考を示したものである。まず、本プログラムでは教材研究で授業に必要な専門的知識の補強を行った。次に、指導案作成で

表3 受講生が学習した実践的指導力にかかわる知識・技能・思考

生徒理解	<ul style="list-style-type: none"> ・偏見やマイナスイメージの払拭 ・表面的態度だけでなく背景まで含めた生徒理解 ・生徒と深くかわらうとする姿勢 ・双方向(教師⇄生徒)の学びの意識化
授業運営	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的スキルの習得 (人前で話す、話し方、声かけ、表情、発問、応答、時間配分、机間巡視、板書)
学習指導案作成	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のイメージを具体化する能力 ・コミュニケーション力や思考力を育成する授業展開の理解
教材研究	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識の習得 ・文献講読、情報の収集と精選の方法

は授業のイメージを具体化する方法について教材研究と関連付けながら指導し、さらにコミュニケーション力や思考力の育成を重視した学習指導案を作成することで学習指導案作成力の質的向上を目指した。授業運営に必要なスキルは、模擬授業や練習授業で訓練し、研究授業の中でそれらは意識化された。そして、受講生は授業での生徒とのコミュニケーションを通じて生徒に対する偏見やマイナスイメージから開放され、生徒理解が深まったのである。

また、個々の知識やスキルは授業検討会やレポート課題を通じて他の要素と関連付けられ、より深い理解が獲得された。そして、こうした知識やスキル獲得の成果としての研究授業の成功すなわち成功体験が教職への意欲向上につながる事が確認された。以上のことから、実践的指導力を育成する本プログラムの有効性が確認されたといえよう。

Ⅲ. 研究授業の分析と成果

次に生徒側からみた研究授業の成果について検証する。まず、朱雀高校の概要と当該生徒の実態について述べ、続いて授業観察の結果と事後の感想文、テスト結果などの資料分析から、生徒の獲得した知識や能力および学習に対する意欲の変化を検討し、最後に、コミュニケーション能力の育成の視点から研究授業の成果を検証したい。

1. 京都府立朱雀高校定時制の概要

朱雀高校は、京都市内のほぼ中央に位置し歴史的にも文化的にも恵まれた環境にある。また、全日制、定時制、通信制の3課程を併設している。定時制の教育課程は普通科単位制であり、修業年数は4年と3年がある。大多数は4年コースを選択しており、3年コースは僅かである。在籍生徒数は現在230名(2005年)である。1年次の募集定員は80名であるが、卒業に至る生徒は約5割で、その多くが1年次に中途退学していく。この現状は全国の定時制高校に共通したものである。

定時制では人間関係や家庭環境に問題を抱えて入学してくる生徒が少なくない。入学者の主な志望理由は「中学時代に不登校であったが定時制になら通えると思った」、「家庭が経済的に苦しいので働きながら学びたい」、「第一希望の高校に落ちた」、「全日制の高校の人間関係についていけずに退学した」などである。また、約8割の生徒が就業(アルバイトを含む)しており、生活費や学費をすべて自分で賄う経済的に自立した生徒も少なくない。そのいっぽうで就労体験がないまま卒業する生徒もいる。定時制高校の全国的な傾向であるが、不登校経験者の入学が年々増加し現在は約5～6割にのぼる。入学後も不登校を繰り返す生徒もいるが、定時制で自分の居場所を見つけ卒業していく生徒が多数派である。

2. 「発達と保育」の授業内容と受講生徒

朱雀高校定時制の家庭科の設置状況は、必修科目は1、2年で「家庭総合」(4単位)、選択科目は3、4年で「発達と保育」(2単位)、4年で「フードデザイン」(3単位)であり、選択科目の受講者は十数名である。「発達と保育」は2005年度から開講された選択科目である。授業の主な内容は下記の通りである。1学期(乳幼児の発育・精神発達・人間関係の発達・栄養と食事・被服と寝具・基本的な生活習慣・健康管理と事故防止)、2

学期（保育の必要性と意義・遊びを通して行う保育・集団保育、児童観の変遷・児童福祉）、3学期（児童虐待・子育て家庭への支援・エンゼルプラントと子育て支援）。学習方法はプリント教材を用いた講義形式が中心であるが、実習や提示したテーマについて感想文を書き各自が発表する活動やビデオ視聴なども取り入れている。実習内容は保育人形を用いた抱擁、授乳、沐浴などの実習（2時間）、離乳食の調理（3時間）、産着の作成（10時間）である。これらの実習は研究授業の前に実施された。

受講生徒は、表4に示したように13名（3年）で、男子5名、女子8名である。年齢構成は10代8名、20代3名、30代2名とバラエティーに富み、定時制の特色を示している。うち不登校経験が判明している生徒は3名である。この他にも不登校経験が推測される生徒が数人いる。生徒たちは少人数であるにも関わらず、特定の者とししか人間関係をもたない傾向にある。また、精神のバランスを欠いて拒食症となった配慮を要する生徒も含まれる。生徒

表4 「発達と保育」受講生徒の様子

	性別	年齢	生徒の様子
A	男	10代	明るく人間関係は良好
B	女	10代	活発で思考力が比較的高い
C	女	10代	不登校経験者 特定の生徒とのみ関わる
D	女	10代	通常の間人間関係は良好 人見知りする
E	女	10代	不登校経験者 人間関係は良好
F	女	10代	リーダーシップがある 人に対する好き嫌いが激しい
G	女	10代	不登校経験者 摂食障害
H	女	10代	朗らか 見知り激しい
I	男	20代	高校中退 妻子あり
J	男	20代	家庭環境に問題（経済的・家族関係）
K	女	20代	高校中退 学力は比較的高い 特定の生徒とのみ関わる
L	男	30代	正社員 無口
M	男	30代	正社員 人間関係は良好 年齢の割に幼い

の「発達と保育」受講理由は「将来、役に立ちそう」、「子どもが好きで興味があったから」、といった積極的な理由と「英語や世界史はいやで、他に取るものがなかったから」、「単位が取りやすそう」など消極的な理由の2種類が含まれ、生徒間に学習意欲に格差がみられた。ここでは、意欲の低い生徒への支援も大きな課題であるといえる。なお、「将来、保育士になりたいから」といった進路と関連した理由はみられなかった。

以上のように、生徒間のコミュニケーションの育成および学習意欲の低い生徒への支援は、本クラス生徒にとって重要な教育課題であるといえる。

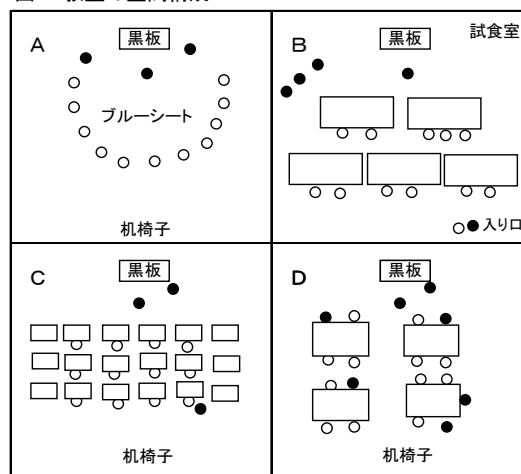
3. 授業における空間構成と生徒の参加状況

双方向的なコミュニケーションについて学ぶには、教室の空間構成や物理的な距離に配慮することが効果的である。朱雀高校の机椅子の配置は黒板に向って等間隔で数列、机椅子が置かれた一般的な配置である。これは教師から生徒への一斉授業の形式としては合理的な空間配置であるが、本授業が目標とする双方向的コミュニケーションには不十分である。そこで、初回の研究授業では図1Aのように机を教室後方に寄せて教室の前方に空間を設け、そこに椅子を半円形に人数分ならべ、中央にブルーシートを敷いてハイハイ運動が実演可能なスペースを作った。授業者はいずれの生徒からもほぼ等距離に位置し、全員と向き合い視線を合わせながらコミュニケーションをとることができるよう配置した。

表5は授業の主な活動と生徒の反応を示したものである。初回の導入では授業者が歌を歌い終わった後に大きな拍手がおこり、紙芝居では全員が集中して視聴し、内容確認のワークシートに記入した。授業の後半では和やかな雰囲気が進められ、ハイハイの活動では授業者が演じるのを興味深く観察し、中央のシートの上で実演する生徒はいなかったものの全員が着席の状態では授業者の指示に従い手足を動かしてハイハイを体感した。

第2回の授業は離乳食のロールプレイングがしやすい試食室を使用した。試食室は普通教室の半分程度の面積しかないが、前後左右の生徒との距離が近く今回のロールプレイングには好都合であった。机椅子の配置は図1Bであり、ここでは通常より狭い空間で互いの物理的な距離を近づけることにより生徒間のコミュニケーション

図1 教室の空間構成



●授業者・補助者 ○生徒

が活発になるよう配慮した。

1名の生徒が教室の入り口付近で参加という形態をとったが、彼を含め全員が授業に参加した。まず、導入で全員がクラッカーや衛生ボーロを食べることにより、授業に対して興味を抱き、その後の摂食機能の説明について集中して聞いた。ワークシートに記入、質問にも誠実に答えようとしていた。ロールプレイングでは最初は戸惑いもあったが、数分後には授業者の指

示にしたがって、アイマスクや声かけなどのロールプレイングをしていた。活動の感想も全員がプリントに記入し指名されたものはその内容を発表した。

第3回の授業では、最初は教室（通常の配置）で行い（図1C）、授業の後半は班ごとに机を向かい合わせ（図1D）にしてフォトランゲージを使った話し合いを実施した。ここでは、前半は製作を含む個人の活動、後半はグループ活動と変化をつけるとともに、前半では教室中を使ってチャイルドビジョンを使った疑似体験活動を行い後半では班形態を取りグループ活動に集中させた。

チャイルドビジョンの製作には、予想よりも多くの時間がかかったが、全員が完成しこれを使って子どもの視野を体感した。次のフォトランゲージの活動でも全員が参加し、授業者や授業補助者の援助によって生徒相互の積極的な意見交流もみられ、グループでまとめたことを全体に発表することができた。

以上のように、授業の観察結果からはいずれの授業も生徒が集中して取り組んでいる様子が窺えた。

4. 感想文の記述と授業観察結果の分析

各研究授業の終了後、生徒には自由記述で感想文を課し、翌週までに回収した。回収率は第1回（出席11名、提出8名、73%）、第2回（出席12名、提出7名、58%）、第3回（出席12名、提出9名、75%）である。生徒たちの多くは自分の思いを文章で表現することが苦手であるが、提出された感想文では普段よりも分量の多い文章を作成するなどの積極性がみられた。この記述内容と授業の観察結果から授業に対する関心意欲、内容の理解度を分析する。

個々の感想文を全体の文脈から、授業を肯定的にみているか否定的にみているかを判断したところ、初回授業では8名中7名、第2回は7名中7名、第3回は9名中9名が授業に対して肯定的な意見を述べていた。また、初回で「慣れていないのは分かるけどやっぱり先生というよりは学生って感じ」とのべ、授業に対して否定的であった生徒も第3回では「あのチャイルドビジョンをしてすごい実感があって楽しかった」と肯定的記述に変化した。このように、生徒は回を重ねるに従って研究授業を肯定的にみているといえよう。

個々の感想文の内容は大きく①授業の雰囲気、②授業者、③教材や教育方法、④内容理解の4点に分類できる。

このうち、①②に関する記述は初回の感想文に多く、③④は2回3回に多い。これは、初回は授業の内容よりも授業者や全体の雰囲気に生徒の興味が集中していたが、2回以降は授業の内容そのものに興味関心が集中したためであると思われる。

①授業の雰囲気について記述したものは、初回7名、第2回2名、第3回3名である。ほとんどが「楽しい」授業であったと述べ、一部が緊張した旨を記述していた。ただし、初回に緊張した生徒も第3回では「あまり緊張はなかった」と記述するなど、全体として生徒が和やかな雰囲気の中で受講したことが確認された。

②授業者については、初回7名、第2回2名、第3回3名が記述していた。記述内容をみると、初回では先述した否定的な文言（「先生というよりは学生って感じ」1名）を除き、「熱意がすごく伝わってきてすばらしかつ

表5 授業の主な活動と生徒の反応

	授業内容	生徒の反応	備考
1 グ ル ー プ	オリジナルソング	驚き・驚嘆、拍手	授業者との距離感が近くなる
	紙芝居	全員が目し視聴	普段より集中
	ハイハイの実演	興味深く見ていたが、全体の前で演じるものはいなかった	普段は全員の前で発表する機会はほとんどない
	椅子に座ってその場でハイハイ	全員活動に参加	活動を全員が行うことは少ない
2 グ ル ー プ	クラッカー・衛生ボーロ試食	意識化、クラッカーと衛生ボーロの違いを発見	普段より集中
	ロールプレイング	最初は抵抗感があったが、全員活動に参加。1名は大学生とロールプレイングを行う	普段は関わらない生徒同士もペアとなり授業の中でコミュニケーションをとる
3 グ ル ー プ	チャイルドビジョンの作成と着用	製作に手間取るが、全員着用し子どもの視野の狭さに気づき驚く	活動を全員が行うことは少ない
	フォトランゲージ	授業者や授業補助者の援助により全員参加、生徒相互間の積極的な意見交流もみられた	S校教諭も2名参加、コミュニケーションを深める

た」といった熱意が伝わったという言葉や「また来て欲しい」「友達になりたい」といった好意を示す表現が記述されていた。次いで第2回では「教える側の大変さがわかった」、「自分と同じ年位の人が頑張っているのを見て感動した」の言葉にみるように、授業者の立場からみた記述がなされており、授業者と生徒との距離が近づいたことが分かる。そして、第3回では「最後の授業で淋しい気持ちである」、「できればもっといろいろな授業をして欲しい」など、継続して関係をもちたいという気持ちが生まれていることが確認された。

③教材や教育方法は、初回4名、第2回6名、第3回6名が記述している。初回は「紙芝居がわかりやすい」「ハイハイの実演が面白い」というように、「わかりやすい」「面白い」という一言で済まされているが、第2回では「離乳食はおいしくなかったけど、ちゃんといつ食べさせるものかがわかりやすかった」のように、教材や教育方法によって何を得たかが、具体的に説明されていた。第3回も同様であり、例えば「チャイルドビジョンをつけて普段自分が見えている視界を見てたら全く大人とは違って視界が狭く見にくかった。子どもはいつもあの視界で生活しているんだと気づかされた」のように教材を通じて理解した内容が記述されていた。

④内容理解については③と重複するがあるが、初回は2名、第2回6名、第3回6名が記述していた。初回に「知らないこともあったので勉強になったと思う」と抽象的に記述していた生徒が第2回では「声かけやスプーンに少量のせて、いろいろ工夫して毎日の食事をしていることがわかった」のように理解した内容を具体的に記述するなど回を重ねるごとに理解が深まったことが確認された。加えて、第3回では「フォトランゲージでは写っている人が止まっているせいか大人が子どもに話しかけているだけなのに怒っているようにも見えたり、周りの物の高さと子どもの高さがわかったりした。大人と子どもの見える世界が大きく違うことが本当にわかった」のように、まとまった文章で学習内容について述べている生徒もみられた。さらに、「今までの授業を無駄にしないようにこれから先も自分なりに勉強していこうと思いました」のように、内容理解の延長として学習意欲の向上が確認される記述もみられた。また、本授業の内容を試験（学年末試験）で問うたところ、平均正答率は62.5%であり、他試験（1・2学期）の正答率の平均（56.1%）よりも6ポイント高く、この結果からも授業内容は通常よりも理解されていたといえるだろう。

5. 事例研究

これまでみたように、生徒の授業参加および内容理解は全体として良好であり、研究授業の目的である①乳幼児の発達を踏まえて子ども（他者）を理解する（知識・理解）、②乳幼児（相手）の視点から育児支援を考える（思考力・判断力）については感想文や試験成績からも成果が確認された。さらに、ここでは研究授業の最大の目標であったコミュニケーション能力の育成について、特徴的な生徒の事例を紹介することにより、その成果を明らかにしたい。

（1）事例1 経験知の共有

男子生徒 A（25 才）はクラブ活動のトラブルが原因で高校を中退し家業を手伝っていたが、友人に勧められ再び高校進学を決意した生徒である。昨年（2004年）結婚し、7月に第一子（女兒）が生まれ仕事と学業を両立しながら子育て中であるが、結婚、出産、子育てについてはまわりへの影響を考えて公にすることをためらっていた。その彼が研究授業を終えたのち、「学校に家族を連れて来てみんなの前で子育ての話をしてほしい」と自ら申し出たのである。そして、最終授業に妻子とともに出席し、妊娠・出産・子育てについて発表した。これは研究授業を経て、外部からゲストを呼ぶことに抵抗感が薄れたこととコミュニケーションを重視する双方向型の授業の意義を彼が理解したからであると考えられる。

最終授業における彼の感想文には「子どもが大勢の前で泣かなくてよかった。クラスみんなが僕ら夫婦の話を真剣に聞いてくれてうれしかった」と記述されていた。また、授業に参加した生徒は次のように述べている。「2人とも若いのにしっかりしていて、夫婦で子育てを楽しみながら頑張っている感じが伝わってきた」、「赤ちゃんがなんでも口に入れないように部屋の中を片付けたりしたり、生まれる前は激しい運動をしなかったと聞いて赤ちゃんのからだはデリケートなんだと思いました。2人とも幸せそうでうらやましかったです。A君は若いのにえらいなと思いました」、「やっぱり赤ちゃんが生まれると親の自覚がわいてくるのだなと思ったのと子どもの成長がわかりそれが楽しみなのだと思った。赤ちゃんを生むのはうれしいけど、責任と苦労があるのだなと改めて思った」。

このように、Aの子育て経験を皆で共有し、7ヶ月になるAの娘の様子を観察することで、研究授業で学習した内容をより深めることができたのである。また、Aは「来年も授業で子どものことをするのであれば、協力します」と述べるなど、学年を越えて経験知を共有したいというAの関係性の広がりが確認されたのである。

(2) 事例2 他者理解の深化と学習意欲の向上

男子生徒B(23才)は、彼のアルバイト収入で一家の生計を支え、幼いきょうだいの世話も一手に引き受けているため、生活と学業を両立させることが難しい状況にある。すでに6年間在籍しているが、休みがちで授業に出てきても居眠りしてしまうこともある。研究授業においても初回は欠席、2回目は授業が始まる前に帰りたいと意志表明するが、かろうじて教室の入り口付近に座る形で授業に参加した。この時の離乳食のロールプレイングはクラスの生徒ではなく学生と実習するに留まった。

しかし、授業の感想文には「すごくわかりやすく楽しかった。ひとつ恥ずかしい事は食べさしあうのは無理です。絵も上手で見やすかった。表もきちんと分けられていて見やすく、離乳食もそれぞれの時期に合って作られていた。温かさもちょうどよく見た目もわかりやすく市販のものよりちゃんと作られていてよかった」と具体的に学習内容とそれに対する意見が述べられており、授業に主体的に取り組もうとする姿勢がみられた。そして、3回目のフォトランゲージのグループ活動においては班のリーダー的な役割を果たし、活発に意見を述べるなど、普段の授業の様子とは異なる積極性をみせたのである。これは彼が幼いきょうだいを世話することで得た体験的知識と教室での学習が結びついたからであると思われる。Bは授業の感想において「すごく子どものことがよく分かり勉強になった。とくに子どもの視線の高さや見える範囲の広さが違ったり、周りを見るのに首を動かしてみることがよくわかった」と述べるなど、彼が日常的に世話をしている幼いきょうだいの姿(「周りと見るのに首を動かして見る」と学習内容(子どもの視野)が結びつき、より深い理解が得られたのである。Bは家庭の事情から授業参加が難しい生徒であるが、「授業で習ったことで視野の狭さ等も勉強できた。この授業を習わなかったら、そんなこと考えもしないと思う。だからこそこの授業の大切さがわかる」と最後に述べるなど、授業への意欲の向上が確認された。そして、このことがグループ活動において他生徒と積極的にかかわろうとする姿勢につながったと考えられる。

6. 授業研究の成果

生徒の授業参加および授業内容の理解は全体として良好であり、学習意欲の向上も確認された。コミュニケーション能力についても事例1で示したように、育児に関する自分の経験について家族とともに発表しクラスで経験知を共有するなど確実に向上がみられた。

定時制では様々な年齢の人々が学んでおり、生活経験も社会経験も多様である。こうした多様性を生かした学びを展開するためには、事例2でみたように、経験知と学習内容を結びつける教材と個々の経験知をクラスの中で共有し学習を深める授業運営が必要である。そして、このような学びの中で、生徒の学習意欲やコミュニケーション能力は高まっていくことが確認された。

3回の研究授業を通じて、受講生と生徒の双方に学習意欲やコミュニケーション能力の向上がみられた点は、本プログラムの大きな成果であると考えられる。

文 献

1 井上えり子 山内拓司 2008年 家庭科教員養成における実践的指導力の育成(1)―高大連携による保育の授業研究― 京都教育大学紀要第112号投稿中。